君への21球

神狩アイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君への21球

【Nコード】

N4188J

【作者名】

神狩アイ

【あらすじ】

将来の不安を抱えて学校に行くのが怖くなってしまった私を、やかましくて、人ゴミだらけで、めっちゃ暑苦しい甲子園へ連れ出したんは、同級生の「虎キチ」だった。アホかーっっ!!!なん
で私があたと野球見に行かなあかんねっ!!!。(。・。・)

(前書き)

阪神タイガース以外の球団のファンの方はおおいに気分を害するかも知れないのでご注意ください(笑)。

氷以上に、溢れる言葉が冷たかった。幾万、幾億もの言葉の波が私を沖へ、沖へと押し流そうとしている。本当に必要な言葉なんて、この世界にほんの少ししかないというのに。悲しい歌を歌っても、涙で声が震えて上手く旋律をなしていない。いくら寂しい歌で自分を慰めても、無駄だという事に気がついたのはずっと前だというのに。ソプラノ音域に追いつけないぐらい声が枯れて、私はもう一度涙を拭き直した。手元の毛布の端はすでに濡れそぼっていて、私はそれが頬に当たる冷たさを心地良いと感じた。空気中に無駄に溢れる言葉より、ずっと気持ちいい冷たさ。夏の暑さを和らげる、その冷たさ。

また、涙。また、拭く。膝を抱えて座り込み、肩に毛布をかけなおす。今にも誰かが部屋のドアをノックして入ってくるかもしれない恐怖に、何度も身を強張らせた。動く事すら怖くて、いつも眺めている机の前のアイドル歌手のポスターにも目が向けられない。部屋の電気もつけず、普段かけっぱなしのMDコンポも静かにしている。耳に入れたイヤホンから流れる軽快な英国ポップスも、ギターのメロディーひとつひとつが悲しく聴こえる。スライドギターの耳につく音色。悲しい歌を聴けば元気になる、と歌っていたのは一体誰だったろうか。それを信じて私はMP3のメニューから邦楽を選びなおした。もう、どの音楽を頼りにすればいいのか分からなくなっていた。アコースティックギターのフィンガーノイズが妙に物悲しくて、私を静かに慰めてくれているみたいで、また涙を零す。いつか脱水症状で死ぬかも知れない、そう思うぐらい泣いた。あとのぐらい泣けば私は癒されるのだろうか。いや、それ以前に、私はあとのぐらい生きていけばいいのだろうか。自分のため、他人のため、意味のない何かのために。

誰にも知られずにひとりで死ぬのが一番楽なのかも知れない。だけ

ど私にはまだ、お父さんも、お母さんもいる。私が死んだら二人は泣く。だからまだ、死ぬに死にきれない。これから先、ひとりで戦っていかねければならないのかと思うと、身の毛もよだつ恐怖に駆られてMP3のボリュームを上げる。切ないストリングスが一層強く脳に響く。世界そのものが、自分の存在が、途轍もない高さの波になって襲いかかってくる。

突然、乾いた音と共に部屋のドアが軽く叩かれ、私は数センチ飛び上がった。イヤホンをはめている両耳をふさいで、頭から毛布をかぶって震えた。大音量で流れる音楽の隙間から、母が部屋に入って何かを喋っているのが気配で分かった。そして、毛布の上から優しく肩を撫でられる。

「鏡子、もう五時過ぎやし、あと少しで御飯の時間やで。お弁当も食べてないんやろ。おなかやすいてるなら、少しでも食べたら、元気になるで」

「いらん。出てって」

私はいつもの強い語調で吐き捨てた。ストリングスに集中する。お母さんの声なんて今さら聞きたくない、下手に干渉されたくない。毛布一枚挟んだ向こう側で、母がため息をつくのが分かった。そのため息が、私をひどく責めている。一言二言、何か喋っていたが、ストリングスで聴こえない。しばらくして、ドアが音をたてて閉まるのが分かった。私は随分たってから静かに毛布を取り払い、母がいないのが分かって、少し声を上げて泣いた。寂しくて、ベッドの脇に置いてあった大きな熊のぬいぐるみを抱えて、幼い頃それにつけた名前を何度も呼びながら泣いた。くーちゃん、私ってひどい奴やんな、私、またお母さんにひどいこと言ってもうてん、最悪やんね、私、これからどないすりゃええんやろか。

ぬいぐるみのくーちゃんは何も答えない。それが救いだっただ。家族で楽しく過ごしていた頃の思い出が、たくさん脳裏に浮かんでくる。これだけたくさんの思い出があるというのに、それだけの過去があるというのに、どうして崩れなくちゃいけなかったんだろう。

もうどれぐらい学校に行っていないのか、数えるのも惨めになってくる。そろそろ出席日数も危なくなってくるかも知れない。戻らなければいけないだろうけど、とにかく学校に行くのが正しいと思っっている親に「行きなさい」と何度も強制され、教師は家にもおしかけて私を無理矢理にでも説得して引つ張り出そうとし、私は完全に人間不信になった。人間は誰も他人の気持ちに親身になつて語ろうとしない。友達も、教師も、親も、誰もかれもが私の敵で私の気持ちなど何ひとつ理解してはいなくせに理解したつもりでいる。世間の顔色をうかがつてばかりの人間なんて大嫌いだった。

確かに最初の落ち度は私にあつたのだ。テストの欠点続きで単位が危ぶまれ、卒業できるか否かまで追い込まれた。推薦入試で大学はどうにか合格し、入学金も授業料も払つたのだが、卒業出来なければ大学も取り消しである。二期の中間、期末と三期の卒業審査がまだ残っているが、三年生の時に一回でも欠点を取れば卒業は難しくなり、あとの試験でいくら頑張っても、三年間のテスト全ての平均ではじき出すから無駄、というのが私の学校のシステムだった。一学期の二回のテストで私は両方とも古文で欠点を取つたが、不運な事に私のクラスを受け持っている古典の先生は非常勤で追試を受けさせてもらえない。普通に考えれば卒業など一生無理な話である。先生に責められ、親に責められ、私はもう、どうすればいいのかわからなかった。

別に、大学の入学が取り消されても、高校を卒業できなくても、どちらも構わない。それで人生が終わつたわけじゃないのだから。ただ、あとで大学入学を取り下げても入学金の返金は認められず、親は数十万円ものお金をドブに捨てなければならぬ。それが嫌だった。常日頃から仲のいい親にそんなことはさせたくなかった。それに、中卒と高校中退という身分はこの日本社会では、はからずも生きづらく作られている。

しかし、もう手遅れなのだ。あとでいくら頑張つて試験にのぞんでも、もう無駄な話なのだ。私は完全に絶望し、高校を退学するよう

な奴がこれから先まともに生きていけるはずがない、と家に引きこもった。勉強もできないし、要領も悪くて、友達も作れない私がどうやって社会で自立する？ 性格も悪いし、実行力も弱い、いつも全ての事に逃げ腰の私が。努力してこそ自分の人生がある。何度も親に言い聞かされるたびプレッシャーになり、それで娘を励ましているつもりになっている親を金輪際避けた。引きこもってはかりじや何も始まらない、それじゃ墮落の一途を進むだけ、ということは嫌と言うほど知っているが、思い出すたび諦念が沸いて出てくる。不安が不安を呼び、毎晩泣くだけじゃ気分が晴れなくなった。

これからどうすればいい。こんな私が、ちゃんと生きていける自信がない。死んだ方がずっと楽だけど、まだ、ほんの少しでも泣いてくれる人がいる。だけど本当は、この界限から逃げ出したいくて仕方がない。

誰かに打ち明けたい。本当は、死にたいんだっていうことを。

五時半近くになって、坂本龍一を聴いている私の耳にもはつきりと玄関のインターフォンの音が聞こえた。しばらくして、母が一階から私を呼んだ。

「弘志君が来とるで、挨拶ぐらいしときなさい」

その言葉に、私は慌ててMP3を切った。YMOが唐突に途切れて、日常の音が聞こえる。外界の車の音、鳥の鳴き声、風の音、布団同士が擦れる音。私はベッドから跳ね起きて、慌ただしく一階に下りていった。階段を半分ほど下りたところで、すぐ目の前の玄関に、弘志が立っていた。いつも通りの明るい笑顔。彼の姿を見て、私は急に泣きたい衝動に駆られたが、それをぐっと我慢して平静を装った。

「どないしたん、弘志」

「鏡子、今すぐ支度せえや、甲子園に一緒に行こう！」
静寂。

私はたつぷり十秒は置いて「はあ？」と返した。そのまま階段に座り込む。真つ暗な布団の中にもぐりこんでいてまだ慣れていない目を瞬かせ、彼の出で立ちをよく見た。白い帽子にはアルファベットのTとHを合体させたロゴマークがプリントされ、53と刺繍された真つ赤なりストバンドをつけ、首からは大きなバットをぶらさげている。そしてシャツは、風通しのよさそうな白の布地に縦の縞模様、6と背番号が描かれ、表には大きく「Tigers」と刺繍されていた。

このなりで家からここまで来たんかい、こいつは。どこからどう見ても、これから甲子園か道頓堀に向かう阪神タイガースファンの格好である。

そういえば弘志は阪神ファンだった。学校でも常に仲のいい男子生徒たちと昨夜の試合について熱弁を繰り広げ、下敷きやペンケースも阪神タイガース仕様だ。二年前の優勝の時は、クラス全体で意味もなく胸上げされていた。年に五、六回は甲子園球場に試合を見に行っているらしいが、しかしその「正装」を間近に見るのは初めてなので、呆れると共に、少し感動した。

私は思いつきりため息をついた。
「悪いんやけど、私、今は外出たくないねん。人と話すのも嫌やし。盛り上がりだと思っけど、一人でどうぞ」

「何ゆうとんねん、チケット二枚あるから、タダで連れてつたるで」「人の話を聞かんかい。タダやからってほいほい出て行く尻軽な関西人やと思うなかれ」

「たまにや外の空気を吸わんと、寿命早まるで。それに、甲子園は楽しいし盛り上がるから、鏡子も遊ぼうや。陽の光浴びんと、肌に悪いで」

なんかしつこい。私は一瞬ちらりと居間の方を見て母の助けを求めたが、彼女は彼女で「せつかくやから、行って来い」と笑顔で送り出している。引きこもりの娘に何をさせるか。反論しようとしたが、先刻彼女に向かってひどい言葉を吐いたのを思い出し、喉の奥まで

出しかけた声をぐつと我慢した。

別に甲子園に行くことに抵抗はない。プロ野球の試合中継は毎晩のように見ているし、よく家族と騒ぐが、実際そこに行ってみようという気になったことがこれまで一度もないだけの話だ。あの、日本の野球界の全てを見てきたような築八十年を誇る緑色の球場そのものには、魅力を感じたことはなかった。母に助けを求めたのは大間違いで、もしここで私が断ればしびれを切らして「ほんなら鏡子はお留守番しとつてな、私が代わりに行って来るわ」と言つて弘志と一緒に出かけにいきそうな目つきをしていた。私は一瞬下がり、うつと口を引き結んで母を睨み、しかし相手はにこにこ笑つて手の甲で私を追い出すような仕草をするので、こういう時の対母の対応法のちよつとした皮肉も言葉を選べずにいた。自分の国語の成績が呪わしい。

ひどい母親だ。親不孝の私が言う台詞じゃないだろうが。

私は落胆し、まあ学校じゃないからいいか、と開き直り、部屋に戻つて着替えた。母親に頼んで、彼女の応援バット一式を貸してもらつた。思えば、甲子園に行くのは初めてである。

最寄の阪神電車駅まで二人で歩いていき、まだ時間の余裕があるからと、弘志はいきなり私に大きなシャツの入ったビニール袋を渡した。中には、弘志が着ているものと同じ、応援ユニフォームが一着。「甲子園は神聖な場所だから、正装せな罰あたるで」
うそめかせ。

しかし私は逆らえず、ぶつくさ文句を言いながら駅のトイレで着替えた。ユニフォームは思ったよりぶかぶかで涼しい。前にはタイガースのロゴと背番号1、後ろには同じ大きな背番号の上に「TORIANI」と書いてあった。誰だっけ、と思いついてトイレの大きな鏡の前で化粧も済ませた。ぶかぶかで裾が長いユニフォームに、ミニのデニムスカートとピンヒールは相性が悪いんじゃない

ないかと、外で待つていた弘志に尋ねた。

「大丈夫、そういう女は甲子園じゃ普通やから。虎柄の水着とかのもっとケバい格好したのんも、むっちゃおるし。テレビ中継に映るためなら何でもやる阪神ファン。あ、それと、これもお前にやるわ。甲子園行く女の子はみんな着けとるで」

そう言つて弘志は私の頭にがばつと何か力チューシャのようなものをつけた。手探りで触ると何か猫耳のようなものがついている。手鏡で見ると、それはピンク色の虎の耳のだった。ふわふわしていて、コスプレしているアニメオタクのようだった。

「かわいい」

「気に入ったんやったら、やるで」

「えっ、悪いわ、そんなん」

「ええよ別に、俺の姉ちゃんと同じようなん何個か持つてるし。男の俺が着けてもキシヨいだけやから」

姉まで阪神ファンかい。私はぼそつと突っ込みながら、ありがとう、と言った。もらったのは正直に嬉しかった。

甲子園駅行きの切符を買い、同じようなユニフォームに身を包んだ乗客と一緒に電車に乗った。これが帰りには凄い事になるんだろうな、と私は何となく予想できた。

「鏡子が元気そうでよかったわ」

ドアのすぐ近くに立つて発車を待っていると、弘志がいつも通りの笑顔に少しだけ安心したような色を添えて言った。頭一つ身長の高い彼を見上げ、私はきょとんとしてしまった。その時は、何を聞かれたか分からなかった。

「もう一ヶ月以上も、学校、来てへんやん。みんなしよっちゅう心配しとるで、鏡子のこと。夏休みになるまでに来んかったら、クラス全員で鏡子の家におしかけたるかっつて話も持ち上がったるぐらいやし」

「そんなにみんな、心配してるん？」

「そらそうやる、クラスメートが登校拒否なんて、誰だつて心配の

ひとつやふたつぐらい、するに決まつとるやん。何か悩み事あるんとちゃうかとか、誰か鏡子をいじめたんかとか、先生がきつい事ゆうたんかとか、やっぱり単位不足でシヨック受けとんのかとか、色々と仮説あがつとるけど」

あえて言うなら三、四番目だ、理由にするとしたら。だけど、私はそれを言わなかった。言つたら言つたで、クラス全員で「成績重視社会反対！」とでも喚いて教室に立てこもり安保ばりのクーデターを起こしそつだからだ。関西人は本気でやりかねない。

弘志は話を続ける。

「あまりに心配やから、俺、みんなに内緒で今日来てもうたけど、喋れるだけましやな。鬱病とかやったら人と会話なんか出来ひんてゆうし。証拠に、甲子園行こうゆうたらちゃっかり来とるしな」

言い終わるとほぼ同時にドアが閉まり、電車が走り出す。私たちふたりはドアの前に立って手すりを掴んだ。たつた一人で様子を見に来てくれた弘志に、一瞬は鬱陶しいと思ったものの、申し訳ないと思った。出来れば誰の目にも触れないところで死にたい、と思っていた私の腕を物凄い力で掴まれ、世界のこちら側に引きずり出されているような感じがした。それだけ必死になっているのが、言葉や仕草に出さずとも何となく読めた。

「ごめんな、心配かけて」

責められているような気がした。正直に謝る私の姿に困惑しているのか、弘志はしばらく何も言わなかったが、お前が頭さげるなんて珍しいな、と吐き捨てられた。私は拳骨で彼の額を小突いた。

「でも、何で甲子園なん？」

ふと思いついて訊ねると、彼は一塁アルプス前列席のチケットを二枚、目の前でひらひらさせて、この通り二枚あるから、と言つてのけた。

「結構ええ席やろ。普通は二五〇〇円やで。これが大阪ドーム、いや、ちやうな、京セラドームやったら内野指定席レベルで、千円ほど高くなるけど」

「じゃ、何でそのうち一枚を私に捧げてくれんの？」

「誘っただけ。鏡子が元気になればなって」

「二五〇〇円するチケットやのに、太っ腹やねえ」

「気にすんなや、どうせ親父がタダでもらってきたんやし」

ああそうですか、それ聞き飽きました。彼の父親がよく仕事上のコネでチケットを手に入れてくるらしいが、常日頃自慢してはクラスで友達を誘っているのもう聞き慣れている。

かんがみれば、弘志とはかれこれ十四年近い付き合いになる幼馴染だ。幼稚園の入学式の時に初めて出会い、互いの母親が意気投合したことで会う機会がこの時点からかなり多く、気がつけば仲良くなっていた。小学校、中学校と同じ公立の学校で過ごし、よく一緒に遊びに行ったりした。あまりに仲がいいせいで周りから勝手にカッブル扱いされるが、実際はただの友達であり幼馴染だ。高校受験で私は男女共学の私立を志望し合格したのだが、当の弘志が狙いの公立高校に落ち、滑り止めとして受験していた同じ私立高校に併願入学してきた。結局、十八歳になる今まで人生のほとんどを共にしている。

性格が悪いと自分でも分かっているし、人を敵に回しやすく仲のいい同性が少なく、周りから恨まれ陰口を叩かれているにも関わらず、それならそれで結構、と勝手気ままに歩く私を受け入れてくれたのも弘志だ。登校拒否に陥ったとき、誰よりも早く感じて電話をかけてきた。その時、二時間にも及ぶ涙の愚痴や相談にも、延々と付き合ってくれた。

性別こそ違うものの、互いの相談や悩みも親身になって受け止められるし、一番理解しあえる親友として胸のうちの明かせる仲だ。あの意味、同性同士の友情より強いものを、私たち二人は持っている。ずっと無言でいると、外の世界が少しずつ暗くなって、甲子園の強いライトがかなり遠くの方で輝いているのが見えるようになった。

外野をぐるりと一周するようにしつらえてあるそのライトの光はあまりに強烈で、試合が延長戦に入った時など近所迷惑になるんじや

ないかと思うほどだった。かぐや姫を迎えに来た月の遣いたちが発する光に圧倒された護衛たちの気持ちが分かる。そして、そのライトの下で照らされる、日本中の高校球児の聖地は、まだ遠くてよく分からないがテレビ中継で見ると遥かに大きく、本当に町のご真ん中に突然現れたような球場だった。途方もない威厳を放って、私たちを待ち構えている。私は意味もなく緊張してきて、「TORI TANI」と書かれたユニフォームの端を軽く握った。

やばい始まってまう、と一人で喚く弘志に手をひかれて、阪神甲子園駅到着と同時に電車を走って降りた。長い急な階段をどんどん降り、改札口を出たところで曲がって、先に帰りの切符を買う。

「帰る頃には、警備員が人の流れを整理せなあかんぐらい混むから、これは甲子園慣れしてる人間の常識やで。コンサートなんかでもする奴、おるやん」

甲子園慣れしてる人間の常識に私は呆れた。

ぱっと見では、私たち二人は阪神ファンの恋人同士に見えるかもしれない。だけど、本当にこれは事実だが、私たちは何故か友達同士ののだ。確かに私と弘志は男と女だし、肩を並べていけば第三者から何か特別な関係があるのだと思われて当然だろう。普通に考えても、幼馴染とはいえ、十四年間も一緒にいれば相手を想い、異性として気になる気持ちが生まれても別に不自然ではない。だが、どうしてだか、異性として互いを見ることはこれまで一度としてなかった。それは私の暴力的で男っぽく、自分勝手な性格の悪さが、弘志と似ているからかもしれないが、結局原因は分からない。弘志は弘志で、性格のせいで友達が少ない。同じような境遇で、性格の悪い奴は性格の悪い奴と仲良くなる、類は友を呼びかねない法則に従って私たちは出会った、それだけの話だ。それ以上の関係はいらない。試合開始に遅れるからと急いで彼に手をひかれるのも、別にやましい感情があるわけではないと十分分かっている。幼い頃から、ずっ

とこんな調子で一緒にいたからだ。時に私をからかったり、軽くいじめてくる事もあるけれど、やっぱり最後には最高の親友同士なのだ。

「鏡子、ジェット風船買ってこようや。テレビ中継より、生で見るほうがむっちゃ綺麗やで！」

誕生日が二ヶ月ほど私より遅れていて、二十センチは身長差のあるその異性の親友は、はたして無邪気に財布を出しながら出店のジェット風船を指さしていた。駅から甲子園に行くまでの長い道路の脇で、夏祭りの夜店のようなものがずらりと並んでいる。そこでは阪神ファンの出で立ちとしておなじみのバットやキャップ、ユニフォーム、グッズや軽食を売っていた。私が財布を出すより早く、弘志は既にジェット風船の袋をゆづに四つも選んでいた。一袋に五つも風船が入っているのに。

「そんないっぱい買うん？ ちょっと多いやろ」

「いや、こんなもんやで。ラッキーセブンと試合終了と二回、打ち上げるからな」

「だからって二人にしても多すぎやろ、これは」

「鏡子は片手に一個ずつ持てばええやろうけど、俺は二個ずつ持つ主義やから」

器用な奴だ。もはやジェット風船のプロである。さすがに四袋も買うと高値がつき、中で飯食う金がなくなる、と言って弘志は他に何も買わなかった。

「かわいいカップルさんやねえ。今日は甲子園デートなん？」

店の中年のおじさんは、つり銭を渡したあと私たち二人を見比べて嬉しそうに微笑んだ。私たちはほぼ同時に手を振り、いやいやまさか、と否定した。

「こつ見えて恋愛感情は皆無なんですね。俺らただの仲ええ友達同士」

「そうゆうとるうちに、大人になったら付き合っとったりすんねんで。おっちゃん、ここで君ら二人がいつか手え組んで歩いて来るの、

待つとるからな」

なんかあながちジョーク交じりの発言とも思えないので、私たちは苦笑しながら手を振り続けた。二人の進展を祈って、とどこまでも言い続けおじさんはジェット風船をもう一袋おまけしてくれた。もうけもん、と弘志は甲子園に向かって歩きながら浮き足立っていた。「どないして甲子園に入るん？」

「ちよい待ち、チケットに入場ゲート番号が書いてあるから」
そう言いながら弘志がポケットをまさぐっている間に、私は目の前に広がる甲子園を凝視した。高速道路の下を通って、突然そびえたつツタだらけの球場に、目を見張るばかりだった。いつもテレビの中継で見るのは球場内だけなので、外からこんなにはつきりと見たのは初めてだった。学校の校舎よりずっと大きくて、その外壁一面がツタで覆われているのは聊か奇妙だった。ここが全国の高校球児の憧れの場所なのだと思うと、この古い球場が途轍もなく神秘的で、重くどつしりと構えているように見えた。

阪神タイガースショップの前を通って球場をぐるりと回り、随分離れた場所にある狭いゲートから入った。入り口で関係者の服を着た人にチケットを切ってもらい、指示通りに暗い階段を上っていく。建設から八十年がたつ古い甲子園球場内は、今にも崩れそうで、しかしそれに古臭さやボロさは感じられず、時代の流れや威厳が肌で分かるほど堂々としていた。ほんの少し明かりがついているだけの暗い階段の壁には「ウェーブ禁止」と大きな張り紙があった。球場の床や土台そのものが古くなっているからだろう。夏の高校野球で、観客席から応援している生徒たちがやたらと飛び跳ねたりしているが、あれは実際どうなのだろう。弘志に尋ねても、「確かにあれは年寄りの背中でびよんびよん飛んでるようなもんやんなあ、大丈夫なんやるか」という答えしか返ってこなかった。

軽食を売っている甲子園内の通路から、座席番号どおりの出口を通って一塁側アルプス席に出た。急にふきぬけたように視界が開け、障害物が何もない空間に出た。目の前に広がるのはひたすらグリー

ンと夜の闇とライトの光。下に広がる大きな観客席はすでに大勢の人で埋まっていて、グラウンドでは数人の選手がちらほらと見受けられる。既に試合は始まっていて、一回の表のワンアウト、ランナー無し、ツースリーまで進んでいた。まだ阪神タイガースは守りなので観客はそれほど盛り上がっていない。テレビ中継でおなじみのバックスクリーンや壁中の広告、プレーしている選手の姿を生で見ているという感動に浸っている暇もなく、「ほら、試合始まつとるやないか!」と叫ぶ弘志に手をひかれて席についた。席というよりただの板を横に並べただけのような、荷物をどこに置こうか迷うような小さなスペースだった。

「飲み物買ってくるわ。鏡子は何がいい?」荷物やバットを置きながら弘志が訊ねた。

「何でもええよ。炭酸以外で」

「分かった。荷物見といてな」

弘志は狭い席の間を、人の足や荷物を避けながら歩いていった。彼の着ているユニフォームの背中に、大きな背番号6と「KANEMOTO」の文字があることに、今さらながら気がついた。阪神タイガース不動の四番、金本知憲選手。私たちがいるのは一塁アルプスなので、レフトポジションの彼の姿は本当に指先程度にしか見えな。い。が、前から数十列目の私の目の前にはライトの浜中選手がいて、その右側、バックスクリーンの前には小さな赤星選手がいた。ダイヤモンドの方には内野手と投手、捕手、そして打者が激しい睨みあいをしている。どのポジションも良く見えるので、結構いい席だと正直に思った。

ファールで粘った挙句に打者がサードライナーに倒れツーアウトになり、ネクストバッターズサークルから次の選手がバッターボックスに上がる頃、弘志が帰ってきた。手に二つのジュースを持っている。

「オレンジジュースでよかった?」

「ええよ、ありがとう」

「ちゃんと金は払えや」

「なんや、今日は弘志クンの奢りやないんですか」

ボケ、と言ってデコピンされ私は舌を出して笑った。バッターが二球目から外角高めを打ち上げてセンターフライに倒れてしまい、チェンジになったところだった。先発の下柳投手が何も言わずにベンチへと歩いて戻っていくうしろ姿が、野球に根性をかけている人間のそれに見えた。

とにかく学校に行きたなかつただけやから、勉強したり、音楽聴いたり、本読んだりしとっただけやで。遊んでたわけとちゃう。てゆうか、遊ぶ余裕なんてなかったわ。精神的に追い詰められて、毎晩夜になったら自然に涙が出て来んねん。だって、考えてみいや、高校卒業できひんってことは、中卒学歴になるってことやで？ そんな、まして退学なんて、社会で通用するはずないやん。あまつさえ私なんか要領悪いし、性格も最悪やし、ぶっちゃけ社会に出てから普通に生きてかれへんやろうなって、ずっと不安やった。私みたいな人種が一番、人に恨まれて刺されて死ぬ結末を辿りやすいんやろうし。生きてく自信がないねん。自殺も考えたわ、まじで。でも私には家族がいるし、死んだら、弘志、怒るやろ。だけど、家族や弘志に私が墮落した人生送るところも見られたくないねん。だから私は死にたい。退学になって、一生負け組としてくだらん人生送るずるひつぱるぐらいやったら、死にたいねん。嘘ちゃうで、ほんまの話や。いや、うん、ごめん、弘志にこんな話したところで、解決なんて見つかるはずないし、聞いてて嫌やろ、ほんまごめん。忘れて、弘志。

「そこまで聞いといて忘れろってか？ そっちの方が無茶やろ、お前アホやな」

やっと打ち明けたと思ったら、弘志の第一声はそれだけだった。彼の目は鋭く、表と裏の間の僅かな時間の間盛り上がっている甲子園

の雰囲気と相反していた。アホだと言い張る彼の声と違って、眼が怖かった。

「中卒学歴が何やねん、世の中、高校とか何回も退学喰らってそれでも胸張って生きとる連中がアホほどおるんやで」

「せやんな、弘志には分からんやろな。弘志は成績ええから、普通に生きてりや勝手に高校卒業できるし、大学も決まっとるしな。人生投げ捨てた人間の気持ちなんか分からんやろ」

「失礼な言い方やな、それ。俺だって自殺未遂ぐらいあるわ」
そんな話は幾度となく聞いた。教師や親に反抗的な彼はいつだって消極的で、ふざけてばかりの笑顔と心の中は全く違う。私の訴えにもいつも真剣な眼差しで聞いてくれて、自分の辛さを話してくれる時はいつも彼は涙ながらだ。お気楽能天気とは違う。人間、誰だって自殺ぐらい一度は考えるものだ。高校退学を迫られるまでポジティブに生きてきた私だったが、弘志はそれよりずっと前、中学に入る少し前から、自殺未遂を繰り返していた。彼の涙は、今まで何度も見てきた。

「けどな、死んだからって何か変わるわけでもないやろ。生きてたら変わるものも見つかるかも知れん。あくまで「知れない」やから、何もなかったらしけるし、それまでの人生ずるずる生きるのが辛いけどな。でも、人間ってそのために生まれて来たんやと思う。だから俺は生きるんや。生きてたら阪神の試合が見れるし、美味しいもんも食える。損得勘定でやっぱそうゆう結論に勝手に辿り着くもんやで、普通の人間」

甲子園の五万人の観客が一斉に歓声をあげる。バッターボックスに先頭打者の赤星が登場したのだ。真っ赤ナリストバンドに手袋をはめて、黒いバットを振り回して素振りの練習をする。弘志は応援バットを持って立ち上がり、他の客に混じって応援を始めた。

「赤星、甘い球が来たら初球から狙っていけや！ゴロでも何でもええからとにかく塁に出て、一発かっこええ盗塁決めろよ！」
周りのおじさんたちに負けない大声で叫ぶ弘志。クラスで友達と一

緒に楽しく阪神の話をしている姿と何も変わらない。目が先刻の鋭さを隠し、きらきらと輝いて見えた。その明るいオーラと、乱反射せんばかりの笑顔に、一瞬、どきりとした。別にいやしい感情があるわけでもないけれど、かっこいいかも、と思った。思った自分が気色悪くて、正面を向いて落胆した。

私は甲子園慣れしていないので応援の仕方もよく分からず、とりあえず席に座っておとなしく応援バットを叩いていたが、ツーナツシングになった頃に弘志に無理矢理立たされ、叫んで応援するよう言われた。横目で覗き込んだ彼の瞳は、やはり闇を失って明るかった。

一回裏は二人出塁するも一打が出ずに終わり、二回表にランナー三塁のピンチを迎えるが先発ピッチャー下柳がしっかり抑えた。さらに裏、表と三者凡退が続き、三回裏、下柳の三振でワンアウト、その後のヒットとショートのエラーが重なって巡った二塁三塁フルカウントのチャンスに、三番シートがスライダーを鋭く右中間に打って走者一掃、阪神タイガースが二点を先制した。四番金本がツーストライク・ワンボールからレフト線上のライナーで出塁、一塁二塁になるが、五番浜中がバットをかすめたセカンドゴロでダブルプレーに打ち取られ、三回終了時点の得点は二点となった。

一時間半に及ぶ前半戦の応援ですっかり疲れきった私に、弘志が甲子園名物のカレーを買ってきてくれた。死ぬほど暑くて全身汗まみれだったが、ほどよく辛いカレーはそんな暑さの中でも美味しかった。お昼を抜いたのでお腹が空いていたが、晩御飯を食べるつもりがまっただけだったので、こんなにがつついて食べる自分が何だか不思議だった。

「三回終了で二点かあ、ちょっと危ないわな、こりゃ。二点ぐらいランナーおる状態で本塁打打たれたら一気にひっくり返されるからな。相手は四番から七番までずらりとホームランバッターが揃ってるし、こっちの不意をつくような鋭い当たりも結構かます選手ばっかしや。ゆうてビビっとして外角投げとったらフォアボールで状況

悪化するし。下柳はそうゆうキャラちゃうけどな。まあ、何かあっても最強ストッパー集団が何とか七回あたりからつないでくれるやろ。俺の経験上、阪神は点差四点以上は必要と思われ、鏡子姫よ」
何だか意味が分からん。スプーンを口にくわえて延々と語る弘志の横顔は、どこかしら子供っぽくて、私はぷつと吹き出した。もう長い付き合いになるのだから表情の変化ぐらい普通に読み取れて当然なのに、思わず笑ってしまい、弘志が眉をひそめてこちらを睨む。
「何がおもしろいねん」

「ちやうって、ゆうとることの中身はベテランのファンっぽいのに、弘志って童顔やからさ、スプーン口にくわえたまんま喋つとつたら子供みたいやねんもん、笑かすわ」

「別に笑かすつもりはないんやけどもな」指摘されて初めて弘志は口のスプーンを取ってカレーを一口食べた。「俺はただ普通に、今日の阪神の試合について個人的見解ならべただけやねんけど、それのどこがおもしろいんかさっぱり分からん」

「分からんでええ、私勝手に笑つとくから」

「ほんなら、俺もうスプーン手えから離さへん。くわえとつたら子供みたいなんやろ？ ツボは分からんけど、今日は男らしく渋く行つたらうやないか」

意味もなく格好つける弘志の姿が余計に面白くて、私は声を上げておなかを抱えながら笑った。意味わからん弘志、もうええ、なんもせんでええから！ と喚いてはしゃいでいると、きよんととしていた弘志の表情が少しずつ緩んでいった。これまで数回しか見たことがないような、ひどく優しい笑顔だった。

「やっと、思いつきり笑ったな、鏡子」

その言葉に、私は笑うのを唐突にやめて弾かれたように弘志の顔を見た。まるで恋人に見せるような、やわらかな笑顔。瞳には安堵したような、気遣うような色が見えていた。いつも一緒にいてもほとんど見せない、少女漫画のような親友の笑顔に、私は急に恥ずかしくなって、頬を膨らませてそっぽを向いた。

「笑ったらあかんの？」

「何照れとんねん。俺が家に行った時から鏡子、めっちゃ暗い顔しとったから、ほんまに元気ないんやなって思っとなったけど、やっと声出して笑ってくれたから安心したわ。笑ったら気分も晴れるで、鏡子。いつまでも引きずっとならあかん。今日はそのために来たんやから、応援して、いっぱい笑って、元気になりや」

弘志が話している間に、バッターボックスに四回表の次の打者が上がった。ビジターチームの攻撃の間は阪神ファンは誰も騒がない。表の隙にみんなトイレとか行くんやで、と食事中にのうのうと言つてのける弘志。それでも、彼の表情は優しいほど穏やかだった。「ありがとうな、鏡子」

一球目のボール球を見送ったバッターの方に視線を向けながら、弘志は呟くように言った。私は驚いてその横顔を見つめ、なんで謝んの、と訊ねた。

「いや、いつもな、鏡子には俺の愚痴とかしょっちゅう聞いてもらってるから、その点はほんま感謝してんねん。俺やって、鏡子と同じようなことで悩んでるし、お互い了解済みやろ、そんなこと。それやから、今日やっと鏡子に恩返しできたって思たし」

「別に、恩着せるつもりはなかったんやけど。それに、愚痴聞くことぐらい、友達やったら当たり前やん。感謝せなあかんのは私の方やで。自分の勝手に登校拒否になった私を、タダで甲子園に連れてきてくれたんやし」

「それこそ俺の勝手やから、チケットのことは気にせんでええつて。いつも一緒にいてくれる恩を返したいだけやってん。俺ら、友達少ないんやし」

弘志の目が少し、寂しかった。ひょうきんな関西人の色とは違う。互いに同じ境遇で、それで一緒にいる親友同士。同性の友情を越えた、時に恋人の愛を越えた絆で、この十四年間を共に分かち合ってきた。苦しい時は常に、どちらかに吐き出すことを忘れなかった。お互い同じような性格の悪さが災いして友人が少なく、本当に心を

許せる相手同士だった。だからこそ、絆がある。私たちには、自慢できる絆がある。

許すことも、分かち合うことも、全てを知っている。お互いの苦しみを知っている。その末に私たちがいる。

弘志と一緒によかった、と、私は改めて思った。人間関係や将来のことで、どちらも涙交じりの訴えを交わしたことは何度もある。その時、受け入れあって認め合うたびに、同じことを思ったものだった。顔が赤くなるのを感じて、

「弘志が友達でよかった」

静かに、でも一文字ずつ確かめるように言った。もう何度伝えたか分からない、この言葉。私と弘志を繋ぐ、神聖な言葉。互いに顔をあわせず、フィールドの方を見つめていた。少しだけ視線だけ弘志の方に向けると、彼の頬が少し赤くなっていて、私の視線に気づくと「改めて言われたら、恥ずかしいやんか」と前髪をかき上げる。その仕草が何となくかわいくて、私は苦笑した。

「ほら、表が終わるで。チェンジヤ」

弘志が指し示す方を見ると、外野手が走ってベンチに戻っている。それと入れ違うようにベンチから出てきて守備につく準備をしているビジターチームの選手。どちらも真剣な表情で、このゲームを制するために戦っている。かっこいい、と思った。テレビ中継で見るとより迫力があって、オーラが出ている。球場中の観客が一斉に応援バットを打ち鳴らす。三三七拍子が始まり、次のバッターの名前と背番号がアナウンスされる。私は立ち上がり、応援バットをメガホン代わりにして、藤本！ と叫んだ。

「外野に抜けるでかいヒット打ってや！ いっそ二塁打でもかまへん、次の矢野さんがつなげてくれるから、まずは塁に出なあかんで！」

声を張り上げて応援する私を、弘志は呆然として見ていた。ここにきて初めて個人の選手を本気で応援した。きゃあきゃあ騒ぎながら他の観客に混じって騒ぐ私の隣に立って、弘志も同じように応援を

始めた。そして、さりげなく、私の頭を乱暴に撫でつけた。私に向けてくれた笑顔は、無邪気で、暗い闇など欠片もなく、私の心にすんなりと入ってくる暖かさを放っていた。

順調に後半戦まで阪神がリードしたまま試合が続いていたのに、七回表、よりによってラッキーセブンに大きなヒットで一点を奪われ、阪神サイドの観客が一気に脱力する。ストッパーの藤川球児も腰に手を当て、悔しそうに表情を歪めている。私もジェット風船を準備しながら「あと一点とかマジ負けるし！」と弱気になっていたが、そこを弘志に叩き起こされ全力で応援していたお陰で、藤川、ウィリアムスとJFKが力投を繰り返し、最終イニングまで二対一を維持することが出来た。九回表、リリーフの久保田がマウンドに上がる。阪神の勝利を確信し、弘志や他の観客が少しずつジェット風船を膨らませ始める。

「なあ、弘志」

「ん？」弘志は風船に空気を入れるのに必死だった。

「ほんま、ありがとうな。甲子園に連れてきてくれて」

「ああもつ、ええつて何度もゆうとるやん。阪神ファンになったか？」

「かも知れんな」スタンドにちらほら見えるカラフルなジェット風船を綺麗だと思いながら苦笑した。

「みんな、凄い熱気やな。こうやって一生懸命応援できるって、むっちゃええことやんね。私、そんな風に必死になったこととかないからなあ」

「受験勉強に必死になつとつたやん」

「まあね。でもやつぱ、実感ないわ。今やって、成績不良で卒業できるかどうか分からんやん？ 推薦で大学に合格したんも、嘘みたいに思うわ。やつぱ私、アホやもん。必死になんかならねへん。なまけてばっかりでろくにええ成績も取れへんから」

私は絶望に目を伏せた。あと二人、あと二人と続くコールと応援バツトの音が、私の心を叱責するように心に打ちつけられる。プラスの明るい音ですら、暗く迫ってくる。

「先生もひどいことばっかするし、親も学校行けって強制するし。私、アカンかもな。いつまでたっても友達できん、性格悪い、ほんで怠け者。確かに非はあるけど、みんなして私を攻め立てようとする。どうせ卒業できなくても誰も何とも思わんで。そんな、私がおらんくても変わらんやん。潔く退学して、死んだ方が絶対楽や。押し付けがましい教師から逃げられるんやったら、そっちの方がええ。周りの連中に苦しめられるぐらいなら、卒業とかもうどうでもええよ、ホンマ」

ジェット風船を膨らませる弘志の手が止まる。彼は市販の持ち手に風船を取り付けると、それをひとまず首にかけて私の方に向き直った。まっすぐに見つめてくる。私は少し驚いて、椅子の上で身を引いた。弘志の目が、射抜かれそうなほど真剣だった。それは少しだけ怖くて、蛇睨みのように私を捉えて離さない。私の心の歪みを、許さない。

「甘えんな、ボケ」

強い、言葉。それも、全身を針で刺されるほど鋭かった。

私は肩を震わせ、さらに数センチ引き下がった。が、弘志は構わず話を続ける。

「成績が悪くて、卒業できんくなりそうなんやろ？ 自分が勉強せんとダラダラしとったつちゆうんに、他人にタライ回して甘えたらあかん。はっ倒す。鏡子自身が悪いんやろ。最低限、人のせいにするな。自分がなまけとったんに、学校に引っ張り連れてくる教師が最悪やとか、友達おらんからとか、そんなもん理由にならん。悪いのは自分や。誰のせいでもない。考えてみい、成績とかさうゆうもんはな、鏡子が最初から努力すりゃなんともなつた話なんや。他の誰かに左右されて辿り着いた結果やない。自分に甘えんな、鏡子。お前が変えれたことなんやで」

鋭く、そして物凄い流れで私の中に入ってくる言葉たちだった。培ってきた何かに風穴が開くようだった。

ワーツ、と甲子園全体が盛り上がる。久保田が二人目のバッターをアウトにしたのだ。だが、弘志の目線はまっすぐに私の方を向いて微動だにしない。周りの声援など気にしていない。私は大蛇に睨まれたように動けなくなつて、真剣な眼差しを向ける弘志を見つめ返すことしか出来なかった。

少しだけ、彼が、悲しげな表情を見せる。

「自分に正直になろうや。自分がどうゆう人間なんか、よう考えや。自分の心にまで嘘ついたらあかん。まして、自分で自分に嘘ついうることに気づいてへんのはほんまのアホや。鏡子は鏡子の中にしかおらん。俺の中とちゃう。だから、自分で気づくしかないんやで」
「明るいライトの中で、弘志の表情は悲しく、今にも泣き出しそうだった。私は口元に手を当て、涙が出そうになるのをこらえた。自分が愚かに思えてくる。私は何をしてきたんだろう、と。これまで周りの人たちみんなを馬鹿にしてきて、自分ばかり被害者ぶつてて、勝手に登校拒否になつて、自分勝手なことばかりの繰り返しだった。私は、ひとりじゃなかったはずなのに。」

十四年前から、弘志がいたのに。

「辛いのは分かるで」弘志の声は掠れていた。

「状況がどうであれ、鏡子がそれだけ苦しむんやったら、さすがの俺も笑い飛ばす気はない。そこまで非情ちゃうで、俺は。けど、元凶が鏡子自身やったら、俺はお前に気づかせることしか出来ひん。」

お前が頑張ればどうとでも状況が変われた話なんやのに、それが出来なくて、今、自分で自分を痛めつけとることになつとるんやで。

そんなん、辛いに決まつとる。辛くて、自分に優しくなれてへん鏡子が、かわいそうでしゃあなかつた。お前が教師に責められとるのは確かやしな。やけど、それでさらに自分を痛めつけるような真似は、して欲しくないねん。だから、気づいて欲しかったんや」

静かに語られる、弘志の言葉ひとつひとつが、優しい。私はそれら

全てを捨てるように、心の中に集めていく。そうしているうちに、耐えていた涙が溢れた。何をやってるんだろう、私は。怖くて、自分や周りの人が怖くて、自分から逃げてばかりで。思い起こすだけで、涙が何度も零れた。

自分を登校拒否に追い詰めていたのは、教師でも、親でも、クラスメイトでも、誰でもない自分。

弘志の指が、優しく涙を拭ってくれた。それでも涙は止まらなくて、周囲のライトスタンドの声援に便乗するように、声を上げて泣いた。そんな私の頬を、弘志の手の平が優しく包み込んでくれる。

「だけど、俺らみんな分かっとなる。鏡子は今、苦しんどるって。死にたいぐらい痛くて、絶望してて、自分を卑下してるんやって。いつも一人ぼっちで泣いとるんやってな。自分で自分を追い詰めて、心の中の光を自分で消そうとしとるんやってこと、みんな知っとなる。そんなんやってたらあかんねん。鏡子、お前はひとりやない。みんながおる。背中を押してくれる人がおる。だから、もう自分でつけた傷のために泣くの、やめなあかん。ちゃんと真実に気付いて、前を向けるようになれば、卒業なんぞ簡単や。失敗してもええ、間違っても構わん、どんな状況でも笑えるようになるんや。正しい道を行くんやなくて、自分が進む道を正しくする、ここ重要な。そのためには、学校休んだって文句は言わん。ただ、元気がどうかだけ心配やってんや。連絡とりづらいし、それこそ一人でふさぎこんで自殺なんぞされたらみんなが悲しむ。自分には友達少ないと思とるやろ？ アホな事はトイレの水に流せ。みんな大好きなんや、鏡子が鏡子が元気でいてくれることがみんなの願いや。だから、無理せん程度に、寂しくなったらクラスの女子みんな鏡子からのメール待つとるし、俺だつていっぱいしの幼馴染なりに遊びに行つたるから、少しずつ元気になっていけばええ。もちろん、みんな内心では、鏡子が元気にクラス復帰してくれるんを待つとるんやろうけどもな。もし訳の分からん理由で理不尽にお前が卒業不可つてなつたら、俺ら

みんなボイコットするから」

言い終わった瞬間、観客が一齐に立ち上がる。弘志は弾かれたように立ち上がり、応援バットを叩く。リリース久保田が投げた最終球は、振りかぶられたバットを掠めることなく、キャッチャー矢野のミットの中に収まった。大きく腕を上げる審判。空振り三振、スリーアウト、試合終了。ツー・スリーからの攻防だった。一齐にジェット風船がうちあげられる。弘志も、手に持っていたホルダーから四つの風船を一気に飛ばした。七回裏の時と同じで、私の周りを舞っていくカラフルな風船は、例えようがないほど綺麗だった。

久保田と矢野が肩を抱き合い、守りについていていた野手たちも集まる。一列に並び、ハイタッチをする。監督やコーチも手を叩いて喜んでいった。

みんな、すごく綺麗な笑顔だな、と思った。選手も、観客も。隣ではしゃいでいる弘志の表情も、綺麗だった。輝いて、きらきらと光って見えた。色々なことを経験してここに集まっているはずなのに、みんな、一つのゲームに夢中になって、綺麗な笑顔を見せている。その表情と、耳をつんざく歓喜の声が、私の中に穏やかに流れ込んできた。誰もかれもが、私と同じように、日々苦しみながら生きていく。だけど私たちはこうやって、ひとつの場所に集いあって、同じ喜びを共有している。それは、私と弘志がこれまで培ってきた、同じ痛みや喜びを分かち合ってきたことと、ひどく似ていた。集団催眠、そんな言葉もあったが、この感情の波はそれを遙かに越えていた。辛いとき、私たちはひとつに溶け合うことが出来る。ひとりじゃない。自分勝手に、自己弁護ばかり繰り返し、ひとりで部屋にこもっていた時より、ずっと、心から明るく笑える気がした。

私の周りの人たちがみんな、万歳をしている。一齐に、同じ気持ちに浸っている。私は弘志に促されるまま、同じように手を上げた。辛い日常に戻ることを恐れるように何度も繰り返される万歳コール。だけど、他の人たちがみんな、極上の笑顔で、今このときの幸せを

噛みしめていることに、私は少しだけ気づいた。五万人の至福。私は打ち上げられたカラフルで美しいジェット風船を目で追いながら、こんな瞬間がいつまでも続けばいいな、と思った。

「楽しかった？」

大盛り上がりを見せた選手のヒーローインタビューも終わり、応援歌の大合唱も二順目に入り、観客がちらほら帰り始める頃、弘志が尋ねた。私は迷わず首を縦に振った。

「また来たいな、甲子園」

「ええよ、連れて来たるから。やけど、今年のペナントレースはもうすぐ終わりやし、チケットももう無いから、また次のシーズンやな」

「三月まで待つのか？ 嫌やなあ、それまで暇やもん、毎年」

「今度はチケット代、ちゃんと払ってもらうからな」

「何なんそれ、せこいな。関西人やったらもつとサービスしたってや、商売人！」

苦笑を交わす。当初の暗さなど、微塵も見られない。弘志は応援バットや残ったジェット風船を片付けながら、いつもと同じ声のトーンで話し続けた。

「今日は、鏡子に元気になってもらおうと思って、そのために連れてきたんやから、とにかく俺の当初の目的はまっとうされたわけや。心配やったけど、元気になって、よかった」

帰ろう、と私の手をひき、観客席の横の急な階段をのぼっていく弘志。私は背後のフィールドをもう一度振り返り、そして前に向き直った。照りつけるライトが、私の背中を押している。笑顔でいると、声をかけてくれている。

私は「KANEMOTO」の文字と大きな6の数字が目立つユニフォームめがけて、弘志の背中に抱きついた。彼は一声叫んで、通路

の端で肩越しに私を振り向いた。表情をうかがい見られるのが怖くて、私は顔を彼の背中に押し付けた。回した腕に力がこもる。弘志は動揺した様子で私を引き剥がそうとするが、しがみつき続けた。

「どないしたん、鏡子。いきなり抱きついて」

そのどもった声が焦っていて、私は悔しくて、一層強く弘志を抱きしめた。広い背中に額を押し付ける。他の少ない観客が一瞥して去っていく中、私は弘志を抱きしめ続けた。涙が零れ落ちそうになっただけど、必死になって耐えた。

悔しくて、悔しくて、弘志に自分の苦しみを伝えられなかったことが悔しくて。でも弘志は私の預かり知らぬところで気づいていた。どうして、私のたった一人の親友は、私よりずっとたくさん私のことを知っているんだらう、と。

そうしているうちに、弘志は前に回された私の手に自分の手を重ねた。そして、優しく指先で叩く。その感触が限りなく優しく、堪えきれなかった涙が一粒、目からダイレクトに地面に落ちた。

「ごめんな」

やっと絞り出した声は、少しかすれていて、まだざわついている甲子園の中で彼に届いたかどうか分からなかった。だけど、抱きついている背中の方こうで、弘志が吹き出すように苦笑するのが分かった。私は意地になって、より強く抱きしめた。

「私、アホやってん。弘志がおったのに、自分だけでふさぎこんで自分の非やのに、自己弁護ばかりやって。こんなんやったら、友達出来なくて当たり前やのに、勝手にひがんどつて。でも、弘志がおってくれて良かった。ありがとう、弘志。でも、ごめんな。迷惑ばっかかけて」

涙が、信じられないほどぼろぼろ零れ落ちる。悩みを打ち明けたとき、いつも弘志の前で泣いているのに、今日は何だか恥ずかしくて、彼に知られたくなくて、背中に顔を押し付けた。

友達が、傍にいたのに。彼がいるから今の私がいるということに気づかず、自分勝手になっていた。悔しくて、私は泣いた。まだ陽気

に応援歌を歌っている数少ない集団の声も、私の耳には届かなかった。

ありがとう、でも、ごめん。それしか言えることはなかった。

弘志はややあつて、しがみついている私の手をそつと剥がした。涙も拭いていないまま上げた私の顔を、中腰になつて覗き込む。あきれ返つたような苦笑が、表情に滲み出ていた。私が口元を押さえつきよとんとなつていると、頬を指先で小突かれる。

「アホか。俺ら友達やろ？ 当たり前つてやつやで」
友達。

その言葉を聞いたとき、私の目からまた涙が零れた。優しくて、暖かみのある、友達というその単語。歪む表情がかつこ悪くて、顔を手で覆う。そんな私の頭を、弘志はその大きな手の平で撫でてくれた。

「だから、自信持つて生きろや。お前はひとりとちやう。俺があるやろ。幼稚園のときからずつと一緒におる仲やないか。お前はまだ頑張れる。胸張つて歩けばええ。悲しい時は今日みたいに野球の試合でも見て、笑え。思いつきり泣いて、それから声上げて笑うんや」
ひどく優しい笑顔を、私はしばらく見つめた。笑え、と、ただその言葉だけが繰り返し、耳の奥で鳴り響いていた。私は、ずつと笑つていなかった。登校拒否に陥つたときも、笑つた事などなかった。笑顔などどこかへ忘れてしまっている。だから弘志は、辛いのだ。私が笑えないから、弘志も笑えない。涙を流すほかに術はない。そう、私は、笑えばいい。私は頬を伝う涙を手の甲で乱暴に拭い、噴出すように精一杯笑つた。偽善の笑顔じゃない。嘘のように見えたくも知れないけど、私はまだ大丈夫だった。笑うだけの力があつた。それなら、きつと大丈夫。お前の胸、背中に当たつとつたで、と陽気に言う弘志の尻に蹴りを入れたときも、二人で一緒に笑つていた。

人間は、落ち込んだ時や気の沈んだ時、最善の解決法は笑う事だと思つ。日常のストレスだつて、作り笑いで十分解消される。人間は

笑う事によって、心を休めている。笑顔は心の薬だ。どんなに辛い状況に置かれても、笑う事によって全てが吹っ切る。弘志も、そんな私の笑顔を求めていたのだ。私だって、弘志が笑っていると心が落ち着く。善悪関係なく、例え誰であろうとも、笑顔を忘れずに生きていく人間は輝いている。笑う事をどこかに置き忘れてきた人間は、近くにいただけで心が沈む。

どんだけ泣きとぅなつても、声上げて笑うんや。

すっかり減った観客に混じって甲子園の外へ出た。熱気から解放された空気は少し冷たくも感じた。ちらほら見受けられるユニフォームを着た人たちが、綺麗な笑顔で帰路につく。あの人たちはどれだけ辛い現実を抱えているのだろう、と思うと、さっきまでの歓声が嘘のようだった。暗い影を背負っていても、あの場所で、みんなが笑っていた。日常がどれだけ苦しくても、甲子園というこの場所では、みんなが心の底から笑える。私はもう一度、甲子園球場を振り返った。その大きなフィールドに、人々を勇気付ける途轍もない力があることを自分で知っているのかそうでないのか、球場はただ静かに佇んでいるだけだった。

駅へいつもの歩調で歩いていった弘志が、急にくりりところらに顔を向けた。そうや、と声を張り上げる。

「鏡子、阪神が好きになつたんやったら、色んなこと教えたるで。

各球団の選手のデータとか、詳しいルールとか、プロ野球の仕組みとか、鏡子が知りたいことやったら何でも教えたる。せやから、学校戻って来いや。俺の阪神仲間とも、一緒に話とかしような。そんな、セ・リーグ優勝したら、一緒に騒ごうや」

弘志はそう言って、いつも教室で見せる、無邪気で明るい笑顔を見せた。彼だって辛いはずなのに、それがまるで見受けられない、綺麗な笑顔を。

(後書き)

少女漫画みたいにベタベタのありえない恋愛小説を書こうと思った
らこんなことに……。
なんでタイガースやねん……。

2003年、私が14歳の時、阪神タイガースが18年ぶりの優勝
を果たしてすぐに興奮状態で書いたものです。
いやーなつかしい(笑)。

ある程度修正はしてますが、下手くそなところは変わらんわぁ w w
w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4188j/>

君への21球

2010年12月10日17時31分発行